
不器用な恋

虹乃 咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不器用な恋

【Nコード】

N2644R

【作者名】

虹乃 咲

【あらすじ】

いつも天然な兄に振り回される妹の珠子、今回も厄介事に巻き込まれてしまった。兄を気にいった社長の娘、そんな彼女とお見合いするらしい。一緒に付いていった珠子は何故か社長の息子に睨まれる・・・珠子の突っ込みでお話が進んでいきます

兄 時々 妹（前書き）

今回は短編になります

兄 時々 妹

目の前には有名な懷石料理店の奥ゆかしい料亭が広がる。外見を
見ただけで一般人が入れる処ではないと分かった。有名な料亭の名
前に腰が引ける。

そんな場所に場違いな二人が顔を上げて屋敷を見ている。

「うわ、凄いね。こんな処でお見合いするなんて」

「でも断らせないといけないんだよね」

「ちょっと兄さん、静かにして」

慌てる珠子とは对象的に兄の雄飛はのんびりとしている。
こんな調子で大丈夫なのかと頭を抱えながら一週間前の会話を思い出した。

「たまこ、俺お見合いするみたいだから一緒に来て」

珠子が住んでいるアパートに来て一服してから雄飛は爆弾を落とした。

珠子は食べていたプリンを吐き出して、雄飛の顔にぶちまけてしまった。

「な、何ですと！」

「汚いよ」

タオルで顔を拭きながらもう一度言う。

「だからお見合い」

「二次元の人？」

「ちゃんと生きてるよ」

「霊長類？」

「ヒト科」

「性別は？」

「女性」

今度こそ珠子は口を大きく開けた。

「良かったじゃない。その人と結婚するの？」

「ううん、断ってもらう」

断ってもらうということは相手からだということだ。

「じゃ、何でお見合い」

「社長の愛娘」

「ああ」

なるほど、それなら納得だ。

つまり雄飛が言いたいののは社長の娘が見て呉れただけはいい雄飛に一目惚れでもしてして結婚したいと言ったが社長が反対して相手のプライドを傷つけないためにも相手に断ってもらうということだ。

雄飛はその間、喋っていなかったが珠子は何年も兄妹をやっているため兄が話さなくても理解した。

そして兄が自分を付き添いに無理にでも連れて行くのも理解した。

「・・・それにしても、さすが社長さん。お見合い場所がこんなんでね」

老舗の、しかも珠子が一生入らないような豪華さだ。

「まあ、ここで待ってても仕方ないから入りましょ」

まだ、事態が深刻だと思っていない兄を引っ張りながら門をくぐった。

社長の娘

わざわざ女将さんが出迎えてくれるなんて、どれだけ常連なんだ。それとも名のある社長だからか。

一応、こんな形なりをしているが雄飛は大手の金融会社に勤めている。ここでお見合いなんて、珠子は一着しかないスーツを着てきたが新しいスーツを買ってくれば良かったと思ったがもう遅い。

はあ、自然と溜め息が出る。

案内された部屋は当然のごとく和室で簡素だが雅やかな雰囲気醸し出している。部屋から見える庭は枯山水で獅子おどしが水の重さで石に当たり、いい音が出ている。

雄飛は普段と変わらない様子だが珠子は緊張してきた。

「ちよつとトイレ行ってくる」

別にトイレに行きたい訳では無かったが座って待っているのが耐えられなく席を立った。

角を曲がると向こうから歩いてきた人に気づかず諸に顔からぶつかった。

「つつ、すみません」

「いや、気をつけ・・・」

余りの痛さに鼻を抑えた。

低い鼻がこれ以上潰れるのは避けたい。

鼻を押さえながら見上げると糊のきいた高そうなスーツを着ている男性が珠子を凝視している。

「本当にすみませんでした」

珠子はお辞儀をして、その男の人から離れた。

トイレから帰って兄の横に座る。

当事者ではないのに緊張している。

横の当事者はのんびりとお茶をすすっていた。

「少し位緊張したら？」

「だって断って・・・」

「だから静かに」

こんな会話を本人に聞かれたら傷つくに決まっている。
どこまでも抜けている兄に苛立ちが募るが24年間付き合ってきたのだ、今更何を言おうとも気にしない人だと分かっている。

「お連れ様がお見えになりました」

女将さんが襖を開けて自然な動作で後ろにいる人物を招いた。

最初に見えた人は男性だ。

まだ30位だろう、目鼻がくつきりとしていて精悍な顔つきだ。
社長なのにこんなに格好良くて若いんだな。
身長も上につく位高く威圧的だった。

しかし珠子は男性の二枚目の顔よりも驚いたのはその顔だ、先程
トイレに行こうとして廊下でぶつかった人だ。
相手も気づいたらしく珠子を立ったまま見つめるので怖い。
だが後ろからの声で社長さんは動いた。

「兄様？」

鈴を転がしたような声とは、まさにこの声だろう。

その声の主を探すとなんと大和撫子のような女性だった。
真っ直ぐな長い髪は枝毛など知らないように艶やかだし顔はモデルより小さく目元の黒子が儂さを引き立てており、さらに頼りなさ
げでこちらが守ってあげたくなるほど可憐だ。

着物も高いのだろう、黒に牡丹の大輪が咲いていて大人っぽさを
醸し出している。

同性なのに守ってあげたいと思った。

だが彼女の目線の先は兄で雄飛と目が合つとぽつと頬を染めた。
何て奥ゆかしい人なんだ、珠子は好感が持てた。

そして二人が座つた。兄の前に社長の愛娘さんで珠子の前に
何故か珠子を睨む社長さんだ。

今、お見合いという名の戦いが火蓋をきつて落とされた。

社長の娘（後書き）

お見合いという名の戦いです

天然

「社長には会社でお世話になっています。これは妹の珠子です」

雄飛の紹介が始まった。

断つてはもうが礼儀を欠かしてはいけない。

「妹の珠子です。兄がいつもお世話になってます」

緊張で胸が大音量を出している。

お見合いなんて初めてだ。しかも自分ではなく兄のなんて。

「初めまして、珠子さん。私、撫子です。どうぞ気軽に呼んで下さい」

呼べるか、一人突っ込んでいた。

くそう、ほんわか笑う撫子さんは素敵だ。
確かにこんな素敵な人、兄には勿体ない。

「・・・」

「・・・」

社長さんが口を開かない。

えと、これは怒ってらっしゃる？なんかしかめっ面であたしの方、
見てるし。

「兄様」

「・・・正三朗の息子、惣一郎だ」

社長の名前は堤 正三朗と雄飛から事前に聞かされていた。
あれ？社長さんじゃないんだ、と思つて兄を見る。

「惣一郎さんは社長の補佐をしている人なんだ」

「若いのに優秀なんですネ」

「・・・」

肯定もしてくれない惣一郎に珠子はどうしていいか分からず半笑
いになる。

その瞬間、惣一郎の目がくわつとしたため珠子は泣きそうになっ
た。

「・・・」

「・・・」

そして沈黙が広がる。

誰か喋つてよう、珠子は泣きそうになりながら兄を見るが雄飛は
自由にお茶を飲んでいる。

この、使えない兄が！心の中で罵倒して恥ずかしいのであろう、前を向けない撫子に話しかける。

「えと、撫子さんはいつ兄と会ったんですか？」

「はい」

益々赤くなる撫子に心が癒やされる。

「去年の忘年会の時ですの。父の忘れ物を届けに行って迷っていた所に雄飛様が案内してくれたのです」

なに英雄^{ヒーロー}気取ってんじゃ。

「そうなんですか」

「ええ、その時運命を感じたのですわ」

運命感じるの早いんじゃないですか？

「・・・兄さん、趣味とか聞きなよ」

こそつと耳打ちした。

「あ、じゃあ趣味とかは」

「はい、生け花と琴を少々嗜んでおります」

いや、これは嗜む程度じゃない。もう師範代の域を越してるはずだ。

「雄飛様は何を」

「えとゲームを少し」

ナイスだ、これでこの男のだらしなさを感じるはずだ。

「まあ、現代に通じてますね」

いやいや、そこはこの廃人め、と思うところでしょ！感心しちゃ駄目です。

「休日は何をしてるんですか」

「やはり習い事が多いですが紅茶を飲みながら本を読むのが好きです」

どこの貴族ですか。

「俺は昼まで寝て、そこからゲームします」

だらしなさアピールだね。

「まあ、のんびりやさんですね」

うおーい、そこは褒めるところじゃない。ってか、段々気付いてきたが、もしかやこの方、天然でいらっしやる？

絶対、恋は盲目以前の問題だ。これは非常に不味い。
天然同士がぶつかる何が起こるか分からない。

社長の息子さん、あなたの妹を諦めさせるため何かいい考えを。アイコンタクトを送って目をぱちぱちするが睨まれた。

これは自分で何とかしろということですか。あなたも妹大事なんですね。考えるが敵は手ごわそうです、隊長。どうしたら良いのでしょうか。

悶々としているうちに天然同士の会話は進んでいく。

「ええ、私遊園地に行ってみるのが夢なんです」

「俺は宇宙に行きたいですね」

もう聞きたくない。

「でしたら、あの、次の日曜日に一緒に遊園地に行きませんか？」

「いいですね」

って、おーい！そこは断るところだろ。なに約束しとんじゃ。

珠子が余りにも凄顔、まるで鬼のような顔で見たもので雄飛は耳打ちをする。

「多分、撫子さんは初めての顔合わせだから緊張してるんだよ。だから冷静な時に次に会って振られればいいんだよ」

なるほど、ただぼけつとしてる兄だと思っていたがしっかりした考えがあっただ。

「その時もついてきて」

「はあ!？」

慌てて口を押さえるが撫子さんは下を向いて頬に手を当てて「私
ったら何て大胆なことを」とか言ってるし撫子さんの兄に至っては
もはやスルーして見ないことにした。

「嫌だよ」

「頼むよ」

何で他人のデートに付き合わなきゃいかんだ。お邪魔虫になっ
てしまうよ。

「絶対、いや」

「・・・佐野のロールケーキ」

ぴくつと珠子の耳が動く。

「付いて来てくれたら買ってあげる」

佐野のロールケーキとは一日に一本しか作らないため予約が一杯
で半年待たないと食べれないのだ。

しかも一本一万円という値段だ。

珠子も話のタネに食べてみたいと思っていたが一万円となるとな
かなか手が出ないのだった。

「半年も待つてられない」

「実は二週間後に届くと言ったら」

実は雄飛、何かあった時のために珠子に頼もうと思いい用意していたのだ。

のんびりに見えて策略家だ。

「・・・」

「ついでに駅前のケーキ屋無料券も今ならついてきます」

「くつ、分かったわ。ただし遊園地代は兄さんがもつてよ」

「当たり前だよ」

誤解しないで頂きたいが珠子は食べ物に釣られる子ではない。
だが一本一万円のロールケーキと駅前の有名パティシエが作った
ケーキの無料券の誘惑に負けたただけだ。

「あ、ご飯がきたねえ」

一段落したのを見計らって女将さんが食事を運んできた。

どれも食べ物だというのに綺麗に盛り付けてあつて食べていいの
が迷う。

しかもお目にかかったことのない貝や魚が一杯だ。

だが珠子はこんな豪華な食事の味が分らないほど先程の返事を
後悔していた。

天然（後書き）

天然って怖いわー

遊園地

子供たちが多い遊園地、どこかしこも家族連れが多い。
そんな中に異彩を放っている4人がいた。

「絶好の遊園地日和ですね」

「そうですね」

今日はこの前の着物と違い洋服だ。見るからにブランドで固めている。

頑張つて珠子は働いている幼稚園の園児たちと照る照る坊主を作つて逆さまにしていたのに見事裏切られた。

照る照る坊主5つじゃ足りなかったと言うのか、神様よ。

「実は私、晴れるようにと照る照る坊主を100個作っただけです」

うん、そりゃあ20倍じゃ負けるわ。

というか、お嬢様、一般常識を斜めに通り過ぎてますから。

「撫子さんは遊園地、初めてですか？」

「いえ、父が遊園地を貸し切りにして遊んだことがあるのですがその時は人がこんなにいなくて寂しかったのですが今日は楽しめそうですわ」

スケールが違う。こんな令嬢と一般人が合うわけないって。

「どれに乗ります?」

「あの、ジェットコースターというものに」

その言葉に雄飛がうっと止まった。

「どうかなさいました?」

「実は絶叫系って苦手なんだよね」

「まあ、では仕方ありませんわ。止めましょう」

「いえ大丈夫ですよ、ね、兄さん」

無理矢理雄飛の腕をとってこそと兄妹会議をする。

「無理だっつの」

「それが作戦だって。弱々しいところを見せて嫌われるがいい」

「・・・吐くかも」

「どん引きだね」

完璧な作戦だ、珠子は清々しい表情でウィンクした。

「分かったよ」

諦めたらしい、とぼとぼと肩を下ろして撫子とジェットコースターの列に並んだ。

だが問題があった。・社長さんの息子だ。

確実に珠子と座るコースだ。

気まずい、何故かお見合いの時から睨まれている。

そして今日もずっとだ。

こんなに敵意を見せられたのは初めてでどうしていいかわからない。

だがロールケーキと無料券のためだ。

珠子は撫子たちの後に並んで、なるべく惣一郎と目を合わせないように話していた。

「……っ」

声にもならない悲鳴を上げて雄飛はよろよろしながら降りた。

顔色は真っ青、身体はブルブル。ださくて情けない男、確定です。

これで撫子さんも振るに違いない、思わず笑みがこぼれる。

しかし彼女は強敵、甲斐甲斐しくお世話している。

飲み物を買ってきたりベンチに雄飛を座らせて膝枕などしちゃって、10人中10人が頷くほどのバカップルだ。

まだ付き合ってすらいないのに。

「ありがとう、撫子さん。もう大丈夫」

「また気分が悪くなったら言って下さいね、雄飛様」

完全に蚊帳の外だあい。もう帰ってもいいんじゃないか。

「次はどうしようか」

「えと、その」

急に撫子がかもじもじし始めた。

「私、遊園地に行ったら行きたいと思っていた場所が」

そう言って雄飛の手を取って目的地へと歩き出す。

これはメリーゴーランドか、それともコーヒークップコースか。

やはり乙女といったらメリーゴーランドだな、自分より年上なのに微笑ましい。

と思ったがついた先には恐ろしい文字が。

「お化け屋敷」

「はい」

可愛らしく頷く撫子とは違って桐生家きじゅうの二人は青くなる。

性格が対照的と言われている二人だが唯一似ているところは怖いものが嫌い、という点だ。

「に、兄さん、ふぁいと」

「・・・無理だつて」

だが世の終わりのような顔をしている雄飛に気付かずに撫子は引っ張っていった。

意外に強かだ、そう思いながら二人を見送って自分はそこらへんのベンチにでも座って待っていていようとしたが腕を引っ張られた。

「・・・」

「・・・あの？」

平均的な身長の子だが身長が高い惣一郎と話す時はどうしても見上げるしかない。

「・・・」

「・・・離して下さい」

だが、離れない。

それどころか惣一郎はお化け屋敷へと目を移す。

まさか妹が心配だから付いていけ、と。

一人で行けよ。

「・・・」

「私は遠慮しますので、どうぞお一人で」

「・・・」

「・・・あの」

「・・・」

「・・・」

無言の威圧ほど怖いものはない。

泣く泣く珠子は惣一郎とお化け屋敷の中へと入った。

遊園地（後書き）

虹乃はお化け屋敷を笑って出るほどの兵つはものです！
皆から、おかしいと言われました

お化け屋敷

「うっ！」

いきなり暗闇から音がした。

「わきゃ！」

何故か血だまりの作り物の生首が置いてある。

「なっ！」

後ろから手が伸びてきた。

悲鳴を上げようとしたら口を押さえられた。

優しい声の持ち主は惣一郎だ。

「大丈夫」

こくりと頷くと口の手が離れたが手は握られたままだ。
しかも世間で言われている恋人繋ぎだ。

「あの」

「・・・」

まただんまりですか。会話をして下さいよ。

だけど男の人と手を繋ぐのは久しぶりで少し胸が高鳴る。

その手は自分より大きく温かい。

どうしよう、ときどきする。

思春期なんかとうの昔に過ぎたのにティーンエイジャーに戻った
みたいにもどかしい。

「つつ、つつぎゃああああー!!」

だが落ち武者が珠子の横から飛び出してきたのに驚き手を振り離
した。

そのまま無我夢中で暗闇を走り抜ける。

光が見えた、そう思って走り抜けると出口だった。

春だというのに珠子は大量の汗をかいていた。

呼吸を整え振り返るが誰一人としていない。

待ってれば惣一郎が出てくるだろう、だが嫌われている人と一
緒にいるのは肩身が狭い。

雄飛も撫子と何とかするだろう。

お化け屋敷の出口から離れて、園内を回ることにした。

だが周りは家族連れやカップル、高校生が多く一人きりの人など
いない。

この歳で一人で来たとか思われるの、嫌だな。

珠子はベンチに座って一人で携帯を弄っていた。

雄飛たちも帰る頃には連絡を入れてくれるだろう。

本当、何で来ちゃったんだろう。食べ物に釣られて来るんじゃない。かつたな。とてもつまらない。

溜め息を深々と付いた。

だが急に目の前に影がかかったと思ったら腕を引かれて立たされた。

事態に付いていけず、がままにされていると荒れた呼吸の惣一郎の腕に抱かれていた。

心臓の位置にちょうど顔が当たるため乱れた心拍が聞こえた。

「誰かに攫われたかと思った」

汗をかきながらももの凄い速さで音を立てる心臓に驚いて上を向くと心配そうな瞳とぶつかった。

「探しに？」

汗をうつすらとかいている姿から考えるに惣一郎は走って探しに来てくれたみたいだ。

なんだ、良い人じゃないか。

今まで冷たい人だと思っていたが温かい血が流れているみたいだ。

「すみません、心配かけて。ありがとうございます」

笑顔を見せると益々抱きかかえられた。

「あ、あの」

しかし離れる様子は無い。

珠子は仕方なく惣一郎が落ち着くまで待つことにした。

だがこの体勢は端から見ると恋人同士が一目を気にせずに抱き合っている図だ。

恥ずかしい。

心拍数が落ち着いたのでゆっくり離れると残念な顔の惣一郎とぶつかった。

「二人を探しに行きます？」

うんともすんとも言わない惣一郎に勝手な解釈をして探しに行くことにする。

しかし何故か惣一郎はもう離さないとばかりに手をしっかりと握るのだった。

お化け屋敷（後書き）

お化け屋敷の幽霊役、やってみたいかも

休憩

行く当てもなく、園内をぶらぶらと放浪していると見知った顔が出店の前の簡素なテーブルに座っているのが見えた。

「あ、いたいた。どこに行ってたのさ」

雄飛の姿が見えた途端、手を離れた。

そのまま前を向いた珠子は分からなかったが惣一郎は残念そうな顔をしていた。

「お化け屋敷で離れちゃったみたい」

焦りながら説明するが怪しまれた。

にやりとされ、惣一郎と珠子を見比べた。

くそう、天然のくせにこういう時だけ鋭いなんて。

「そろそろお昼だね」

無理矢理笑顔を作って休憩を促す。

「そうですわね」

上手く話がそれた。

「実は私、お弁当を作ってきましたの」

そう言つと黒スーツを着たSPのような男の人が出てきて重箱を置いた。今までどこにいたんですか、全く気付きませんでした。

・・どこの大統領ですか。花見じゃないんだから重箱なんていないでしょ。

「すげ」

「うん」

世間知らずなお嬢様にちよつぴり引いた。

珠子も座ろつとすると惣一郎が椅子を引いてくれた。

「あ、ありがとうございます」

「・・・」

つて、何でまた睨むんですか。

嫌いなら止めて下さいよ、むしろ私の心臓も大助かりです。

「珠子さんも兄様と仲良くなられたんですね」

撫子さん、あなたの目は節穴ですか。これがどうして仲良しに見えるんですか。むしろ嫌悪の域を越えてますから。

「さあ皆さん、食べましょう」

中を開けるとどこの商品ですかっというほど豪華で綺麗に並べてあった。

「凄いい上手ですね。私は料理が下手なんで教えてもらいたいほどです」

って自分、何もつと仲良くなりたいたいオーラ出してるの。ここは兄さん、売店の物を食べたいとか言っべきだと思っけど撫子さんの涙ぐましい努力をふいには出来ない。というかしちゃ駄目だ。

「兄に教えてもらいましたの」

「・・・」

顔に似合わず手先が器用ですね。
何とも言えない沈黙が広がる。

「お、美味しいですね」

「うん、直ぐにお嫁に行けるね」

「まあ」

なに結婚フラグ立ててるのよ。もう断れないコースに行ってしまうのではないか。このド天然め。

「これって鰹の出し汁ですか」

「はい」

卵焼きのふんわりとした味が美味しすぎる。

「卵焼きは甘いのが好きだな」

「ちょっと兄さん」

曇る撫子さんの表情に思わず雄飛を責めてしまったが断るためだと分かる。雄飛は卵焼きはどっちも好きだ。

撫子さんに味方してしまう私は結構毒されているみたいだ。

「うわぁ、どれも美味しい。私が撫子さんを貰いたい位です」

「ふふふ、私は雄飛様のものですわ」

ですよね、私が男だったら撫子さんをお嫁に貰いたいよ。

「ですが兄様と結婚したら毎日美味しいご飯が食べれますわよ」

「ぐ、げほっ」

喉に煮物が詰まった。

「み、水」

さっと目の前にコップが差し出される。

「あ、ありがとう」

だがコップをくれたのは惣一郎、本人だ。
これを飲んだら何か負けてしまふ気がするが背に腹はかえられない。
い。

一気に水を煽った。

しかも背中をさすってもらってしまった。

なんというかいたたまれない。

「ありがとうございます」

今日はお礼ばかり言っている気がする。

にやりと笑う兄にいらつとしたため、もう大丈夫と断った。

「じゃあ最後に観覧車、乗ってく？」

太陽が沈み、うつすらとした暗闇が近づく。
雄飛の提案に皆は同調して乗ることにした。

「珠子さん、私ね、観覧車にずっと乗りたいと思ってましたの」

「何故です？」

雄飛と惣一郎が仕事について話している間、二人は女同士で華を咲かせていた。

「私、本で読んだのですが・・・」

な、何故そこで顔を赤らめるのです。
今から押し倒したくなってしまうじゃないですか。

「観覧車が一番上になった時に、その接吻すると、永遠に別れないのでしょう」

どこの昔の本ですか。そんな話は寂れてしまったと思いました。

「そうですね」

それしか言えなかった。

休憩（後書き）

すみません

虹乃が合宿＆ボランティアで更新遅くなりやした

観覧車

「・・・」

「・・・」

やっぱりこの二人組みですね。

撫子は雄飛と一緒に乗ったため珠子はやはり惣一郎と無言のまま向き合っていた。先のゴンドラには雄飛と撫子が笑って会話しているようだ。

こことはまるで天と地の差だ。

「・・・あ、あのさんは撫子さんと兄のお付き合いに反対なんです・・・すね」

社長さんは雄飛と付き合うのと反対だと知っていたが惣一郎はどうなのだろうと聞いたが睨まれた。

そんなに睨むまでして反対しなくてもさ、私は兄さんじゃないのにさ。

「・・・ろっ」

「え？」

声が小さすぎて聞きとれない。こんなのが社長補佐でいいのだろうか。

「惣一郎と呼んでくれ」

「・・・」

・・自分の名字がそんなに嫌いなのかな。
だから、そんなに睨まないで下さいよ。

「・・・えつと惣一郎さん？」

「なんだ」

何だ、じゃなくてあなたは反対なのですか、賛成ですか。

「撫子さんが付き合つのに反対ですか」

「別に反対ではない。ただ撫子には決まった相手がいる」

「え？」

それは初耳だ。相手がいるのに雄飛とデートするのはどうだろうか。

「正確には結婚相手が決まってる、だ」

やはり撫子は大企業の令嬢であるため現代では非常に珍しい政略

結婚をする。

「撫子さんはもう知ってるんですか？」

「ああ、だから後悔を残さないように最後の我が儘を言ったんだよ」

「それは・・・」

それは悲しい、自分の意志とは関係なしに自分の未来が決まってしまうなんて。

「撫子は覚悟している」

でも、でもつらいよ。何て言えばいいか分からなかった。
好きな人がいるのに違う人と結婚しないなんて、とても切ない。

惣一郎と視線を合わせた。

一瞬、惣一郎は身をびくつと振るわせたが珠子を見つめた。

あと少しすれば惣一郎が何を感じているか分かった気がするのに
不意に惣一郎が視線を逸らした。

残念、そう思う自分に驚いた。

気を逸らそうと前をいく雄飛と撫子を見る。

撫子の肩が強張っているのに気がついた。さらに上を見るとその
理由が分かった。もうすぐ頂上に着くんだ。

頂上に行くと前が見えなくなるため本当にキスをするかわからな
いが最初で最後の我が儘なら叶えて欲しい。

次第に自分が乗るゴンドラも頂上へと傾いていった。

とても綺麗、そしてこんなにも高い。

外の風景に目が釘付けになっていると惣一郎が口を開いた。

「好きだ」

反射的に振り返った。

——息が止まった。

彼の真摯な瞳が私を貫いてる。

呼吸の仕方を忘れてしまったみたいだ。

胸がまるで全力で走った時のように早く高鳴る。

でも走った時のように顔が真っ赤になって疲れるような感じじゃ

なくて、初恋みたいに甘酸っぱくて心地良い感情。

こんなの初めてで、目がそらせない。

こんなに格好良くてどんな女性でも手に入る男の人が私を好き。

そう分かれると胸がほんのりと灯りが灯る。

彼の瞳が熱の籠もったものになるのが見えたと思った刹那、視線を逸らされて外を見た。

釣られて珠子もその視線の先を見る。

眼下には青い、太陽の光を受けて輝いている広大な海が広がる。

なんだ、海のことか。勘違いした自分を恥ずかしく思うとともに
がっかりした。

「私も好きです」

まるで宝石のように太陽の光を浴びて輝く海はとても美しい。
穏やかな風が微かに開いている窓から髪の毛先を揺さぶる。

春のような雰囲気の中、二人が乗るゴンドラはゆっくりと地上へと戻った。

観覧車（後書き）

観覧車の頂上でキスすると本当に永遠なのだろうか・・・
やったことないから分かんないんですけどね

公園

Wデートもどきが終わり珠子はいつもの仕事をしていた。

今日は日曜日、あれから一週間が経っていた。珠子は週末になるとよく近所の公園に行って何も考えずに呆けている時間が好きのため、今日も公園のベンチに座ってはまっている恋愛小説を読んでいた。

この話は不器用な男の人が愛してくれる女性を信じられなく逃げて出して事故に遭ってしまい周りは誰もいなくなったが彼女だけは残り献身的な彼女に愛を信じるようになった話だ。

後20ページで終わりそうでクライマックスに近づいている。

女性の台詞に涙が出そうになった時だ。

横に男性が座った。

目の端に黒いスーツが見えた。隣に座られながら本を読むというのは居心地が悪く珠子は身じろぎした。

なんだか視線を感じる。

横に髪の毛を垂らしながら髪の毛越しに相手を見た。

あまりにも驚きすぎて本を落としてしまった。

「・・・惣一郎さん」

隣の男、もとい惣一郎は落ちた本を拾って表紙を一瞥して珠子の膝においた。

何故ここにいるのか、また無言かい、というかこの歳になって恋愛小説を見ていた自分が恥ずかしい、色々質問したいことや突っ込みたいことがあったが珠子の口は開いたままだ。

「お久しぶりです」

とりあえず挨拶にした。視線を合わせて穏やかに笑う。

惣一郎は少し瞠目した後、首を縦に振った。

これは挨拶を返してくれたということか。

「・・・撫子さんはどうしたんですか」

惣一郎と撫子には挨拶もそこそこに遊園地で別れたきりだった。だからその後の撫子知らない。

観覧車から降りた後ずっと撫子は固い表情のままだった。

雄飛に聞いても言葉を濁すだけだったため珠子も無闇に聞けなかった。

「今日、婚約者に会う」

「・・・そうですか」

私には無責任に政略結婚なんて酷いなんて言えない。

どんなに政略と言っても結局は撫子さんが選んだから。

ただもし私なら好きな人と一緒にいたいと思うだけ。

春だというのに冷たい風が二人の間を吹き抜けた。

「わっ！」

そんな空気を払うように二人の前で小さな子供が転んで一気に泣き出した。

素晴らしい肺活量なのか耳が痛くなる程の泣き声だ。

珠子はベンチからすつと立ち上がって子供の脇を掬って立たせた。

「痛い痛い飛んでけー」

膝についた泥を払って優しく言葉をかける。

「ふ、ふえ」

「僕、名前はなんて言つの？」

「・・・ゆういち」

「そっかあ、ゆういち君は偉いね」

褒められたのが分からないらしく、まだしゃくりを上げながら首を傾げた。

「なんでなの？」

「だってお姉ちゃんだったら、もっと大泣きしてたよ。ママー、パパーって。それなのにゆういち君はママを呼ばないで一人で頑張ったね、偉い、偉い」

「本当、ぼく偉い？」

「うん偉いよ」

珠子は微笑みながら頭を撫でた。
そうすると笑顔になって泣き止んだ。

「ほら遊んでおいで」

「うん」

先程の大泣きなど忘れて遊具に走っていった。

「私、保育士なんですよ」

「知ってる」

「さいですか、あれ言ったことあったかな？」

「良い保育士だな」

見つめる惣一郎の目が優しくなった。

「ありがとうございます」

自然と珠子も笑顔になる。

今日、初めて心が通じ合った気がした。

「あれ珠子じゃん」

その声に振り向くと珠子と同じ歳の青年がジーンパンに手を入れて珠子の方を見つめていた。

公園（後書き）

波乱の予感

ゲーム友達

珠子が声につられて見ると目の前に親しげに話しかける青年がいた。

「あれ、洋祐^{ようすけ}じゃん。なんでここにいるの？」

「お前こそなんでいんだ」

洋祐はベンチの横に座る惣一郎に視線を向ける。

その視線を見て珠子は紹介せざるを得ないと分かり、面倒だと思いつながらも隣に座る無表情な相方を紹介した。

「こちら兄が働いている会社の社長補佐の惣一郎さん」

「初めまして、洋祐です」

洋祐が興味津津といった風に惣一郎を穴が開くほど見つめる。

珠子は洋祐に怒りながらも惣一郎に洋祐を紹介した。

「こっちは私の高校からの悪友の斎藤 洋祐です。全然仲良くしないでいいですか」

「ひでえな、昨日も一緒に部屋で過ごした中だろ」

「変なこと言わないで」

きつと洋祐を睨みつける。

誤解をしないでほしい、こいつとは唯のゲーム仲間である。昨日は二人でお菓子を我が家に持ち込みながら殺し合いゲームをして夜を明かしたただけだ。

色気もくそつたれもない。

「また明日やろうぜ」

「嫌。だって、あんた早いんだもん」

実は洋祐はゲームに詳しいのだが、機械と相性が悪い（本人談）らしく動作が遅いため直ぐに死んでしまったため張り合いが無いが負けん気だけは人一倍強い。

最近はその負けん気が面倒だと思い始めてきたお年頃だ。

「お前のテクニックが良すぎるんだよ」

「普通でしょ。ただ、舐めてただけじゃん」

こいつは私がそのゲーム初心者だと高を括っていたため私に返り討ちにされたのだった。

まあ、何でも人並み以上に出来る私には造作もないことだ。

「頼むよ」

「ええい、あの最新作を買ってくれたらいいよ」

そのゲームは売れ行きが良かったらしく第二作が出るという。かくなる私もそれにはまってしまったため第二作に期待しているが、

如何せん、保育士はなかなか給料がたまらない。
そのため洋祐に買ってもらおうと思ったのだ。

「あれ高いんですけど。まあいつか、またやってくれるんだから」

こういう聞きわけのいい奴はいつでもウエルカムである。

珠子は喜々としてベンチから立ち上がり、洋祐の背中を叩こうと立ち上がったがバランスを崩してしまった。

いや、崩されたのだ、惣一郎に。

今まで黙っていた惣一郎に反論しようとしたが、その顔を見て止めた。というか出来なかったのだ。

こ、怖すぎる。

もともと無口である惣一郎なのに今はまた口が真一文字に引かれており、眼はつり上がっている。
まるで般若だ。

お、恐ろしすぎる。

何も言わない惣一郎は黙って珠子の腕を痛いくらいに引っ張り、ベンチを後にする。

「またな」

陽気な洋祐の声が後ろから聞こえた。

いや、助けるよ！

珠子の心の叫びはにやにやとしている洋祐には届かなかった。

マンション

黒光りするベンツに乗りながら珠子は助手席で身じろぎした。

そして隣で運転している人物を横目で見る。
あれからずっと惣一郎は無言のままだ。

公園から出た後、近くに止めてあった車の助手席に乘せられてシートベルトまで惣一郎に締めてもらった。

何だかいたりつくせりだ、と珠子は恐縮して惣一郎を見つめる。

「・・・あの、どこに向かっているんでしょう」

「・・・」

「あの、惣一郎さん？」

「・・・俺の家だ」

信号が赤になったため車を止めて答えたが、今もなお険しい顔は前を向いたままだ。

もしかして撫子さんに会いに行くのだろうか、首を傾げながらもその後は答えようとしない惣一郎を見あげる。

車が高層ビルの前で止まった。いや、マンションだ。しかし何階あるのだろうと車の中から見上げる珠子だった。

惣一郎は降りると助手席を開けて珠子のシートベルトを外してまた腕を掴んでマンションの中へと入る。流れるような動作に珠子は感心して相手の為すがまだ。

途中でドアマンに車をしまっておくように偉そうに（実際偉いんだろう）指示してフロントの横のエレベーターに急ぐ。

「お帰きなさいませ」

途中、見目麗しい受付嬢が挨拶してきたが惣一郎は見向きもしない。そんな態度にめげることもない受付嬢を感嘆の目で見つめっていると受付嬢と目が合った。

だが彼女はやはりプロなのだろう、強引に引きずられている珠子と緒にのような惣一郎を目の当たりにしているのに余計な詮索はせず2人を送る。

できた受付嬢だ、珠子は感心した。

そのままエレベーターに乗り込み最上階のボタンを押す。

「えっと、惣一郎さん？撫子さんがここにいるんですね」

はて今日はお見合いでは無かっただろうか、首を捻るが途中で痛くなったため考えるのを止めて無言の惣一郎を見上げる。

やはり睫が長い、肌も綺麗だ。男性に負けるなんて。

ここが自分の家だったら床に崩れ落ちながら手について絶望のポーズをしていただろうが、ここはマンション、しかもエレベーターの中だ。

やはり監視カメラがある、ここで変なポーズをとったら未来永劫その間抜けな姿が残ることとなる。しかし挑戦すべきか。

そんなことを思っているとチンと間抜けな音がして最上階へとついた。

惣一郎に引つ張られて、エレベーター脇の部屋の扉の前に立つ。

惣一郎は焦ったように鍵を開け、扉を開いて革靴を乱暴に脱いだ。次いで珠子を引つ張るので珠子も履き馴れたぼろい靴をすぐさま脱いでお邪魔する。

「お邪魔しまーす」

惣一郎は珠子を掴みながら片手で器用にスーツの上着を脱いだ。

「っ、わぎゃっ・・・！」

いきなり膝の裏に手を入れられ、背中に手を回されたと思ったら抱き上げられた。驚いて色気の無い声が出てしまった。

バランスが崩れないように惣一郎の首元にかじりつく。

ふむ、長身というのは便利かもしれない。身長が低い珠子には味わえない新鮮さが広がった。普段は見上げるだけの食器棚やクロー

ゼットも同じ高さだ。

ようやく乱暴に下ろされたと思ったら広いベッドの上だった。
どうやら寝室のようで惣一郎の爽やかな香水の香りが漂う。

カーテンは閉められており日光が隙間から漏れているためくつき
りと惣一郎の顔が見える。

何故か陰しい表情の中に熱の籠もったものが見える。

ようやく珠子は自分が危ないと気づいた。

マンション（後書き）

珠子、危機管理能力が全くなっしんぐ・・・

ちよ、次、もしかしたらR15通り過ぎるかもしれない・・・
のでお気をつけて下さい。

なんなら飛ばしてくれてもいいです。

ベッド

いやいや、まさかね。

自分でも言うのをあれだが自分は撫子さんみたいに綺麗ではないし、スタイルもよくない。

口もがさつだし可愛らさの欠片もないと自負している。

そんな自分を社長の息子の惣一郎が相手にするとは思っていないかった。

「そ、そんな訳ないですよね」

からかっているだけですよね、と続けようとしたが目が本^{マッ}気だ。

どうしようと後ろに下がるがネクタイを取った惣一郎がじりじりと近寄る。

後ろの壁まで来てしまったらしく逃げ道がない。

右か左に逃げようと惣一郎から視線を外して隙が出来たときを狙って惣一郎が珠子を寄せる。

「ちよっ・・・」

抵抗して惣一郎との間に手をやって押すがびくともしない。それどころか珠子の細い両腕を左手で掴んでネクタイで縛ってしまった。

きつく縛られたため結構痛い。血が止まって手が使い物にならなくなってしまう。

「痛いっ！」

抗議しようと口を開くと惣一郎の唇が重なった。

「やだ、やだ、やつ・・・っうん」

言葉が飲み込まれて口内に自分とは違う舌が入り込む。

「ん・・・うん、はっあ、ああ・・・」

頭を反らすのが頭を惣一郎に掴まれて固定されてしまった。歯列をなぞり、引っ込んだ舌を強弱をつけて吸われて珠子は酸欠状態だった。

「も、もう・・・うあ」

息を吸い込もうと首を振ったが執拗に舌を追われ、また下唇を甘く噛まれて蹂躪される。

腰が砕けてしまい惣一郎に寄りかかった。

「おねが、も、もう」

止めてと言いたいのには呼吸が乱れて上手く話せない。
くたりと身を預けると服越しに惣一郎の大きな手が背中を撫でて胸へと回る。

「いや、それは嫌。いや、やだ、ねえ嫌だつて。や、やあ、あん・」

今まで恐怖しかなかったが嬌声が上がった。
優しく、また激しく強弱をつけて翻弄する惣一郎に珠子は身を任

せていたがいきなり入ってきた異物に眉をしかめる。

「待って、い、痛い」

だが惣一郎は手を緩めてくれない。それどころか先程より早くなる。

「ちょ、っああ・・・」

その艶めかしい声に惣一郎は動きを止め、声が上がった時に触れた箇所をまた触る。

「やあ、あああん！」

そこをピンポイントでつく。
だんだんと珠子の息が粗くなり、四肢を痙攣させたと思っただけ
つたりとした。

浅い呼吸を繰り返す珠子の腰を掴んで引き寄せる。

「つつ、ぐう。いつ、痛い!!」

初めて受け入れた圧迫感に息が詰まる。生理現象のため涙が目尻に浮かぶ。

その姿にやっと惣一郎の動きが止まった。

「・・・まさか初めてだったのか」

涙ながらに首を振る。

「あ、当たり前じゃないですか。そ、それなのに無理矢理に」

惣一郎は珠子の目尻に唇をやって涙を吸い取った。

「すまない」

そう言つと今度は優しくキスをした。

気遣うようなキスに珠子は緊張を解いて受け止める。

そして性急とは違って優しく愛撫を始めるたも珠子の身体はそれに反応し始めた。

ベッド（後書き）

これってR15通りこしちゃってるのかな？

いや、そうしたら少女コミックとかは何なのだ！R20かもしれない．．

という言う訳を述べますが

「こんな破廉恥なもの、子供には不適切だわっ！」とか思う方、もしR15には不適切だと思ったたらお知らせ下さい

速やかにムーンの方に移させてもらいます

いじわる

先程の早急な行為とは打って変わってさんざん焦らす。

触れて欲しいところを僅かにずらすため珠子の腰が勝手に動くが惣一郎の手はずれる。

「そ、惣一郎さん」

たまらず自分から言ってしまった。

「どうして欲しい」

分かっているくせに珠子に言わせる。

「ね、ねえ」

恥ずかしくて言えないのに惣一郎は先を促す。

結局、珠子は欲望に屈してしまった。

「お願い、惣一郎さん。触って」

初めて言う言葉に真つ赤になり顔を覆ってしまった。

は、恥ずかしすぎる。

だめだ、今なら世間では不名誉な腹上死が望ましい。こんなことを言つて散々焦らされるのなら早く死んでしまいたい。世間でどう噂されようが構わない、今が問題なのだ。

恥ずかしさで頭のネジが緩んでしまった珠子などお構いなしに惣一郎はその言葉を待っていたように甘い疼きのところに触る。

「ふっ・・・」

息が漏れる。

何も考えられなく、頭の中が甘く温かい疼きで一杯だ。

私、どうしちゃったんだろう。

頭の中がふわふわする。

だがまた入ってくる異物には恐怖が隠せない。

「やつ・・・」

「大丈夫、俺を信じて」

熱に浮かされた瞳で見つめ合う。

何かが入ってきた、さっきよりは痛くないが悲鳴を上げようとしたが唇で塞がれてしまった。

「んっ、ん！」

ゆっくりと突き上げられる快楽に酔いしれる。

その快感が全身に広がると、優しい甘さの中、二人で果てた。

心と身体が通ったためか、珠子は夢心地に柔らかく微笑みかけると惣一郎は手首のネクタイを取って赤くなった手首に優しく丹念に舌を這わせる。

感じやすくなった身体はすぐに反応してしまった。

また赤くなった珠子の顔を見て、腰を引き寄せ惣一郎の上へと乗せる。

「は、はぁん」

まだ疼いている身体に差し込まれるがあまりの気持ちよさに動けない。

だが下から突き上げられて甘い声が出る。

「あつ、ん」

「珠子、俺を愛してるって言って」

目をあけると縋るような瞳とぶつかる。

「きゃん！」

「お願い」

突き上げられながら言われても何も考えられない。
思考がまるで霧に覆われたようになる。

「言つて。お願いだから言つて」

「ああ、やつ、ああん。あ、愛して、愛してます。惣一郎さん」

激しくなり珠子は何度目か分からない果てて、ぐったりと身体

を惣一郎の上に倒れて意識を飛ばした。

惣一郎の手が珠子の髪に触れた気がするが瞼が重く意識を失った。

いじわる（後書き）

治那樣からメールを頂き「大丈夫じゃない？」とのお言葉を承りましたので

一人の承諾は皆の承諾だい！

と身勝手に思っている虹乃なのでこのまま掲載しといちゃいます（てへっ

不健全だ！

と思う人は私と「最近の青少年の性の乱れ」について私とディベートしましょう！

確実に虹乃が負けます↑えっへん

不器用な恋

目が覚めるとすぐ横に惣一郎の端正な顔が広がる。

カーテンから朝日が差し込む。どうやら寝てしまったようだ、昨日のことを思い出して一人恥ずかしくなった。

まだ痛む身体をゆっくり起こしながら静かに服を着た。

もう一度、眠る惣一郎を見て寝室を後にした。

「どこに行く」

不機嫌そうな声が後ろから聞こえる。

「あ、あの」

恥ずかしくて顔が見られない。

だって惣一郎さんは一時の快楽のために珠子を誘ったのだと分かっている。

だから出て行くというのに何故引き止めるのだろう。

自分は物わかりのいい女になろうとしているのに何で止めるの。
訳も分らず涙が出てくる。

「どうして泣く？そんなに俺が嫌か？」

「ち、違っんです。あなたを、愛してしまった自分が悲しいんです」

いくら愛しても返ってこない愛。
どんなに待っていてもつらい愛。

そんなのを望んでしまう自分が悲しい。

だが大きな身体に包まれた。
珠子の好きな香水の香りを吸い込んだために安心する。

「そ、惣一郎さん？」

「・・・った」

「え？」

「良かった」

惣一郎の安心した声が耳をくすぐる。

「俺も愛してる」

聞き間違いだろうか、惣一郎から愛してると言葉が聞こえた。

「似合わない言葉ですね」

あまりにも不釣り合いで笑ってしまった。

惣一郎はむっとすると今度は長い思いやりのあるキスをくれた。

惣一郎と付き合ってから聞いた話だがうちの兄、雄飛は撫子のお見合いをしているところに現れて連れ去ったらしい。
まるで愛の逃避行だ。

面倒くさがりの雄飛には似合わない行動だったため最初は信じられなかったほどだ。

どうやら私たち4人は皆、似た者同士だったようだ。
皆、不器用で初めての恋に足掻いていた。

だけどその先に、不器用ながらの先に確かなものがあつた。

「ねえ、あなた」

本を閉じて、自分の夫を呼んだ。

「なんだ」

初めてあった時とは違う笑みを向けてくれている。慈しみの眼差しだ。

「あなたと初めてあった時のことを思い出しただけ」

夫は苦笑しながら座っている椅子の前膝について大きくなったお腹へと手を回す。

「動いたんじゃないか」

「まだ早いわよ、惣一郎さん」

私たち人間は初めから上手に物事なんて出来ない。

失敗をして、何度も失敗を重ねてようやく学んでいく、そして成長をしていく。

私たちは不器用を乗り越えて心を通わせた。そして2人の絆が生んだ確かな物を身に宿すことができた。

不器用な恋（後書き）

やっと終わりました

だがしかし、このままではしっくりこない方も多いでしょう
だからSide惣一郎とかやっちゃったりする予定なので良かった
ら酒のツマミに見てやってください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2644r/>

不器用な恋

2011年5月6日23時22分発行